

## **サラリーマン帝王学のすすめ**

株式会社ロジタント 代表取締役 吉田祐起 著

2002（平成14）年2月25日

「帝王学」とは文字通り、帝王や経営者や組織のトップなど「リーダー」と呼ばれる立場の人たちに必要とされる学問です。いわばピラミッド型社会の頂点に君臨する人たちが必要とする学問と言えるでしょう。

その帝王学を「サラリーマンにすすめる」というのですから、目をパチクリされる方も少なくないと思います。まずは読んでみてのご批判を歓迎します。

### **サラリーマン処世術の変革**

かつての「サラリーマン天国時代」は一変しました。デフレ経済はリストラに次ぐリストラで、世はまさに、「サラリーマン地獄時代」の様相です。

従来当たり前であった「終身雇用制」や「年功序列給制」が崩壊し、代わって台頭してきたのが、「能率給主義」「実力主義」「成果主義」などと呼ばれる賃金システムへの変革です。企業同士のサヴァイヴァル・レースが激しい昨今、サラリーマンとて、実力がなければ失業する時代です。

賃金システムの変革と並行して「雇用形態の変革」がすすんでいます。正社員から派遣社員、契約社員、臨時、パート等々へのシフトと、それに伴って現実味を増しているのが、実質的賃金の下落です。

これらの制度の台頭は、厳しいデフレ経済を背景にした経営者のやむなき経営手法なканずく、労務政策転換の顕れと言えるでしょう。つまり、極めて高い人件費率が経営を圧迫し、競争力が失墜してきたことから、「生産性に見合う賃金システム」への転換を余儀なくされている結果です。

もっとも、こうした賃金制度は、欧米資本主義先進諸国ではとっくの昔から導入されてきていたのです。とりわけ、欧米では失業率が日本のそれと比べて極めて高い水準にあり、10%前後で推移してきたことから、欧米の経営者側にとって労働力はもっぱら買い手市場であり続けたと言えるでしょう。雇用形態や賃金水準といった問題はどちらかと言えば、経営者側の選択に委ねられてきたと思います。

反して、日本の経済界は戦後半世紀にわたって、ほぼ完全雇用状態を維持してきたために、労働力は売り手市場であり続けました。ために、労働力確保に関する限り、経営者側が及び腰であり続けたことも背景にあるのです。サラリーマン天国はかくして構築されたと言えるでしょう。

と、こんなことを考えてきますと、前述した雇用制度や賃金制度の変革も、時代に相応した日本人経営者側の政策転換ではなく、本来の資本主義経済運営に不可欠とされる労使関係のあり方の「欧米後追い」をしているに過ぎない、といった見方さえあると思うのです。ちょっと、皮肉な発言でカチンとくるサラリーマン読者があることを承知の上ですが、ここは一番、これからの時代のあるべきサラリーマン人生を論じる意味で、読み進んでくだされば幸いです。

## サラリーマンへの厳しい注文

ところで、史上空前のデフレ経済の中で、日本の企業「労使」は閉塞感で喘いでいます。政治家や評論家が、寄ると触ると声高に叫ぶのが政治による有効な景気対策や経営者側の意識革命です。どうしたことが、サラリーマン諸氏への痛烈な意識革命を呼びかける人はあまり多くありません。社長さんの自社社員に対する姿勢も然りです。もっとも、会社側の強気のリストラ策断行はその裏返しではあるでしょう。

失業者はゴマンといえる一方、働ける場は多くありながら、職業や職場や待遇などの選択肢においてミスマッチが生じています。つまり、職場や職種や月収に対してちょっと我慢すれば就職口は確保できるのに、それでは飽き足らず、あえてフリーターや失業者の仲間入りに甘んじているケースです。

こんな時代にあっても強気な考えを持つ人が少なくありません。小子化社会だから、いずれ労働力不足になって雇用情勢も何時かは（サラリーマンにとって）好転するだろう、とタカを食っている人たちです。果たして、そうだろうか？と言いたいのですが、先にすすみます。

ところで、大変に悲壮なことですが、自殺者は3年連続で3万人を突破しています。自殺未遂者ともなると、その数は10倍にも及ぶといえます。

交通事故による死亡者数の3.7倍にも達する人が自らの命を絶っている現状は、実に愁うべき事態です。こうした自殺者の中には、中高年者が多いことが顕著です。サラリーマン天国時代を生きてきた年代の人たち、と言ったら酷でしょうか。事実、「日本ののちの電話連盟」の斎藤友紀雄常務理事さんの弁によると、「最近増えている中高年男性。悩みを人に相談するのは恥という美学が早期発見を妨げている上に、雇用不安などから閉塞感を感じている…」とあります。

このような実態を考えてみますと、サラリーマンの心情や姿勢に今ひとつ物足りなさを感じるのは私だけでしょうか？ かく言う私は、満14歳から働いてきましたが、サラリーマン体験はわずか数年です。そんなことからサラリーマン諸氏にちょっと厳しい注文をつけることを勘弁してください。実は、意識革命が立ち遅れているのは経営者でなく、サラリーマン諸君ではないか、と言いたいのです。強いて経営者に対する苦言と言えば、もっと勇気を持って社員に対してこれから述べることを社員諸氏に注文すべきだ、と思うのです。

## 開業率と廃業率にみる日本人の閉塞感

ま、こんな苦言を敢えてするには、それなりの主張があるのです。それは近年の日本人の「開業率」と「廃業率」の実態から垣間見ることの出来る、日本人の無気力さや不甲斐なさです。

中小企業白書からわが国の「開業率&廃業率」の推移をみますと次のことが明らかです。1975年～79年頃の開業率=5.9%、廃業率=3.8%で、起業家精神に関する限りこの時代の日本人はまずまずでした。

それが1983年頃には4.3%、4.0%とそれぞれ狭まり、1986年を分岐点に逆転しました。1994年頃には開業率=2.7%、廃業率=3.2%と完全に逆転し、1997年頃には開業率=3.5%、廃業率=5.6%と、実に愁うべき状態になってしまったのです。これでは、働く場がだんだんと無くなっていく状態です。

開業率が高い低いは経営者の姿勢だ、サラリーマンのせいではない、何を言いたいのか？ といった批判が聞えてきそうです。それが私の問題提起ではあるのですが、ちょっと待ってください。その前に主張したいことがあるのです。

## **米国の開業率&廃業率**

ここで似たような統計を米国の場合で見てください。1983年頃の開業率 = 13.3%、廃業率 = 12.6%といった水準が、12年間ほぼ平行線で今日に及んでいるのです。日本のそれとは桁違いです。さらに、両者（開・廃業率）が交わって日本みたいに逆転する記録はまったく見られません。実質的には毎年1%前後の企業が確実に増えているのです。

米国では日本よりはるかに先がけて、1980年代から産業空洞化が発生しました。あんなことでどうなるのか、と当時のわれわれ日本人は他人（国）事ながら心配したものでした。しかし、米国は見事にそれに代わる産業を立ち上げて今日の経済発展を遂げました。その原動力とは他でもありません、米国人の旺盛な起業家精神でした。規制緩和への国民的コンセンサスもさることながら、ベンチャーキャピタリストと呼ばれる個人投資家の支えもあったからです。個人投資家として、リスクにチャレンジする起業家精神旺盛なセクトと呼べるでしょう。いわゆるIT革命がその典型でした。

10年、20年遅れで欧米を後追いついてきた日本は、産業空洞化の対策が立ち遅れて今日の有様です。その背景には、いわゆる「護送船団方式」と呼ばれる官民もたれ合いによる経済運営と、その中にどっぷりと浸かってきた「企業劣使」双方が自立する気概を失ってきたことにも起因すると思うのです。

国民性の違い、と簡単に片付けられません。好むと好まざるに関わらず、グローバル化している世界経済の中で伍していかなばならないからです。

さ、そこで問題になるのが、国民性、すなわち、生産年齢人口で圧倒的な多数派を占めるサラリーマン族の去就です。このセクトの人たちがどのような人生観をもって歩むか、に日本の行く末がかかっていると思うのです。現役で頑張っている経営者はさて置き、現代はサラリーマンこそが将来においても尚、期待されて然るべき人たちだと言いたいのです。このあたりから核心に入ります。

## **「開業者」になるセクトとは？**

起業家精神（アントゥルプルヌールシップ）を発揮して企業を起こす、すなわち「開業するセクト 経営者」は誰か？ と自問自答してみましょ。

第1のセクトは、親の事業を継承する立場にある人物です。しかし、厳密に言えば、それだけでは開業率&廃業率はプラスマイナス・ゼロで、開業率向上そのものには貢献しません。新規事業を立ち上げてこそ経営者は「企業家」から脱皮して「起業家」になり得るからです。もっとも、既存の会社規模を大きくすれば、「雇用の創出者」としての社会的使命は充分果たせることは事実です。それに、経営者の同族後継者は、経営者のDNAも継承する者として、まずは潜在的起業家精神の持ち主ではありません。

第2のセクトは、ヘンな話ですが、高額な宝くじが当たったとか、高額な遺産が転がり込んできた、といった類の「資産（資本）家」です。予期せぬ「開

業資金」が入ってきたから、ここは一番、その資金を元手にリスクにチャレンジして開業し、経営者人生を歩んでみるか、とって旗揚げするセクトが考えられます。が、果たして？ と首を傾げるのです。

これまたヘンな話になりますが、宝くじが転がり込んできた人が起業家精神を発揮し、リスクにチャレンジして開業された例を未だ知りません。それどころか、働くのがアホらしくなって会社を辞めて遊び呆けて人生を台無しにしてしまった、というケースは少なくありません。

遺産相続のケースですが、ご先祖さまから預かった大事な財産ということからか、さすがにリスクにチャレンジするとか、一かバチか勝負して起業する、といったケースは私の周辺を見る限り皆無です。守りの姿勢が顕著です。

と、こんなことを書きながら、つい最近面白い体験をしました。私のクライアント会社の社員ドライバー研修会でのことでした。正社員より賃金ベースがかなり低い「契約社員ドライバー」の立場にある人たちも含む研修会でのレクチャーでした。ちなみに、彼らは1年間という限定した雇用期間を承知の上で、その期間を無事故実績で契約更新にチャレンジするというセクトです。正社員より賃金など何かにつけて不利な労働条件でもイイ、とにかくドライバーとして働きたいのだ！ といった意欲満々のセクトと見受けます。

ヨシダ流の「デフレ経済論議」はその延長線上で語った「雇用形態の変革」に言及した後のことでした。その彼(女)らに問い掛けてみました。「もし、5千万円の宝くじが当たったらどうする？」と。何と、その殆どが「トラックを購入して将来の個人トラック業者になりたい！」が答えだったのです！ その意欲や起業家精神に大きな拍手を贈ったのは申すまでもありません。

こうしたセクトのサラリーマンは、どっぷりサラリーマンに甘んじることを潔しとせず、自身が限られた労働条件に甘んじてもやりたいことをする、といった強い個性の持ち主だと感じるのです。宝くじで巨額のおカネを得たことを起業家精神に結びつけたい！と意志表示した興味ある話です。

さて、第3の開業意欲満々のセクトに注目して欲しいのです。よ～く考えてみてください。第1と第2のセクトを除いたら何のセクトが残るでしょうか？ そうです、生産年齢人口の圧倒的マジョリティを占める「サラリーマン」しか残っていないことに気付くべきです。

デフレ経済に苛まれて閉塞感に喘ぐ日本経済社会ですが、開業率を高めて、経済を活性化し、日本を救うエネルギーの源泉は、他ならぬサラリーマン諸君だ、というのが本稿の結論なのです。

## **サラリーマンこそが経営者のタマゴ とすれば**

今や、世のサラリーマン諸君こそが日本経済の救世主たり得るのだ、ということがお分りでしょう。とすれば、サラリーマン諸君にとって何が必要とされるのか、ということをお問自答して欲しいのです。そうです、サラリーマン諸君こそが将来の起業機会を目指して「帝王学」を身に付けることが求められている、ということです。自身のためにも、日本のためにも！デス。

「脱サラ」はその典型です。リストラで多額の割増退職金を手にした中高年のサラリーマン諸氏の中で、それを元手に開業したケースは少なくありません。しかし、もしリストラに遭わなかったら、そのままサラリーマン人生で終わっ

ていたかも知れません。その人にとって独立開業することは苦肉の策であるかも知れません。がしかし、それはその人の潜在的起業家精神の発露足り得る、とも言えるのです。リストラがそれを誘発したと言えるでしょう。

一方、サラリーマンの中には、在職中にあらかじめそのチャンスの到来に供えて貯金しながら、人脈や知識や技術やノウハウ等を蓄積し、時機をみてスパンアウトするケースが多くあります。こうしたサラリーマン諸氏にとっては、無意識の内に「帝王学」を身に付けているのです。

心有るサラリーマン諸君は、以上のことからして、「潜在的起業家精神保持者」と言える、というのが私の主張です。

### 「脱サラリーマン思考」「自営型社員」ある学者先生の弁&新聞記事

私の愛読誌「週刊ポスト」は2001年12月7日号で見つけた言葉に「脱サラリーマン思考」というのがありました。企業の人材活用に詳しい法政大学客員教授である西山昭彦さんという方が使われた言葉です。デフレ経済下で「ボーナスの大盤振る舞い企業はどこだ!」という記事です。曰く、「...2年先、3年先に花を咲かせるために常にネタを仕掛け、会社への貢献を上げるにはどうすればよいか考えることが必要だ。いわば、社内において個人事業を営んでいるような感覚《脱サラリーマン思考》が求められているのです。」と。

似たような言葉を2002年1月1日付日本経済新聞で見つけました。「自営型社員」がそれです。流通・小売業界で活躍する幾人かの店長さんの成功例を示す全面ぶち抜きの写真記事です。曰く、「...共通するのは、組織人でありながら、自らリスクをとる自営業者の感覚だ。...」がそれです。

これら「脱サラリーマン思考」「自営型社員」は、いずれも旧来型のサラリーマン処世術から脱却した、いわば「現代版サラリーマン処世術」と言えるでしょう。

さ、そこで強調したいことがあるのです。折角のやる気満々の新型サラリーマン根性であり人生観ではあるのですが、このままでは所詮サラリーマンという使用人のイメージから自他ともに脱却していません。身分はあくまでサラリーマンのままで、考え方だけを変えてやろう、ということに他なりません。これでは折角の経営者型サラリーマンでありながら、おそらく本人にとっても今ひとつ物足りなさを感じさせるキーワードであるに違いありません。

余談ですが、世の経営者は自社社員に対して「経営者になったツモりで働け!」と激を飛ばします。仕事のやりようだけは経営者同様の根性と努力で、ただし経営者の特権は無しで、という、実に経営者のエゴが見え隠れするので。これはまったくイタダケません。

折角、「実(業務実態)」がそうであるならば、「名(経営者身分)」もそうであるように、いわゆる名実ともに経営者として開業する意欲を自他ともに表現できるキーワードを掲げたらいいものを、と言いたいのです。そうした私の想いが「サラリーマン帝王学のすすめ」というキーワードを生み出したのです。

この言葉の行間に秘められた期待や可能性は、サラリーマンこそが潜在的に未来の起業家精神発揮による開業機会を保有しているのだ、ということであって、だからこそ平素から経営者への転身のための帝王学を身に付けるべきだ、というのが私の言わんとするものなのです。

サラリーマン諸君にとってもですが、「脱サラリーマン思考で働けよ」とか「自営型社員の心で働けよ」と社長からハッパをかけられるよりも、「将来の経営者を目指して「帝王学」を学びながら仕事に励みなさいよ」と激励されるほうが、余ほど気持ちよく、かつガッツで働けるのではないのでしょうか。これが私の提唱するキーワードの狙いです。

## 単行本「トラックドライバー帝王学のすすめ」への発想

手前ミソで恐縮ですが、目下執筆中の単行本原稿があります。そのタイトルは当初、「“ザ・プロフェッショナルズ”トラックドライバー諸君への伝言」でした。第1章9節までは、すでに業界誌に発表しています。

以上の経緯によるヨシダ・オリジナルのキーワード「サラリーマン帝王学のすすめ」を思い付くに至ったことから、「...諸君への伝言」を「...トラックドライバー帝王学のすすめ」に変更することにしました。

ちなみに、私はこれまで、「個人トラック制度（オーナー・オペレーター・システム）」のオピニオン・リーダー活動を展開してきました。近年に至り、そのことは単にわが国トラック運送事業の最たる規制緩和政策としてだけでなく、その制度を導入することこそが、閉塞感に陥っている日本人に喝を入れることにも繋がるといった信念を持つに至っています。

前述のように、近年日本の開業率が僅か3.5%、廃業率に至っては5.6%というお粗末な状態です。ところが、トラック運送業界の過去10年間の平均開業率は4.3%、対して廃業率は僅か0.46%です。トラック運送業界は起業家精神旺盛なセクトと言えるであらう。

わが国トラック運送業界は、従来の「最低保有車両台数規制（5両、7両、10両以上）」という規制が緩和され、代わって「全国一律5両以上」と、新規参入条件が緩和されたことが背景にあることから、零細化現象が顕著です。これは経営者自身もハンドルを握っているということを物語ります。おそらく、雇用されるドライバーは、社長の身内かそれに順ずるツーカーの人間関係にある人たちです。それぞれが一匹狼的な、いわゆる個人事業者の感覚でハンドルを握っていると考えられるのです。そのような職場では、ドライバー一人一人の心の中に、一人でも万一重大事故を起こしたら俺たちの会社はいっぺんで吹っ飛んで（倒産して）しまう、という危機感がみなぎっているハズです。これはすなわち、自己責任意識や起業家精神の旺盛な小集団そのものです。

こんなことを考えてみると、「サラリーマン帝王学」はプロのトラックドライバー諸君にこそお誂え向きのキーワードになり得ると考えるのです。くだんの単行本タイトルをそのように変更した理由がご理解いただけると思います。

かくして、私の「サラリーマン諸君への伝言」とは従って、現在置かれている立場やたずさわっている職業人生にあって、給料を貰いながら将来のための帝王学を学ばしてもらっているのだ、と受けとめて頑張ってください、ということ。そうすれば人生は楽しく、ガッツ感も持てると言いたいのです。

ところで、ひょっとして、この拙文を読まれた方の中には、「わが人生では開業することなんて全く眼中に無い、サラリーマン人生で終わりたいのだ。そのほうが呑気でイイからさ」と思われたり、拙論に反発されたりする方があっても知れません。でも、こうした考え方だけはひそかに胸に入れてサラリーマン

人生を歩まれることが大事ではないかと思うのです。5～6%の失業率が慢性化する時代にあって、サラリーマン生き残りのためにも、です。ヨシダ・オリジナルのキーワード「サラリーマン帝王学のすすめ」を胸に、前向きで活力ある生き方、勤め方に徹して行かれることを、と念じるのです。さもなくば、ひょっとしてあなた自身が(も)失業者の仲間入りを余儀なくされることになりかねませんよ、と忠告したいのです。

「サラリーマン帝王学のすすめ」って、それは国民(主にサラリーマン)が戦後の経済発展を支え続けてきた護送船団方式の実質的な経済統制・国家総動員体制に見られる甘えの構造から抜け出して自立することだ、と思います。

「帝王学」を身に付ければ、モノの考え方や人生観そのものも変わってきます。仕事に対する姿勢や取り組み方はもとより、充実感そのものが倍加します。さらに家庭にあっては、文字通り一家の主としての資質や尊厳も備わってくるハズです。家庭の幸せや家族の和と信頼も勝ちとれると思うのです。

ご意見やご批判を歓迎します。 [yoshida@c-logitant.com](mailto:yoshida@c-logitant.com)

以上

\*\*\*\*\*

#### (後記)

ヨシダ・オリジナルのキーワード「サラリーマン帝王学のすすめ」は必ずヒットする、と読んだ私は、それを早い時期に何らかの形でパブリックなものにしたいものと願っていました。そのため、当社のウェブサイトにも早くからこのキーワードを掲載したのですが、上掲の拙著を同ウェブサイト「Logitant Website Reports」に掲載するに先立って、ある経営者団体の機関誌に同じタイトルの拙著短編エッセイを寄稿し掲載されました。

米国の大学に本部を持つ「SAM (Society for Advancement of Management)」という組織の日本チャプター本部(東京都・産業能率大学内)が定期的に出版する「SAM NEWS」誌の「2002年 Spring 版」がそれです。  
<http://www1.ocn.ne.jp/~logitant/writing.html> 「SAM NEWS 10」